

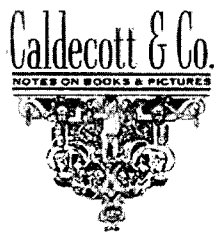
# 絵本の構成と表現手法

## —結末の結び方と空間表現—

藤 本 朝 巳

### はじめに

今日、絵本はさまざまな形で話題となっている。それゆえ、絵本については著書や論文も数多く書かれている。絵本研究に関していえば、1980年代以降に絵本作家たちも作品を描くだけでなく、絵本について論じるようになった。<sup>1</sup>また出版・保育・教育関係などの仕事をなさっている方、児童図書館で子どもと本を楽しんでおられる方、そして、絵本の研究者など、多種多様な職業の人々が絵本について論じている。<sup>2</sup>その視点はそれぞれ異なり、読み比べると興味深いものがある。筆者自身も国内外の絵本を研究し、外国の絵本を翻訳し、また、実際に子どもたちや学生と共に絵本を読むことの多い毎日である。そのような立場から、この論考では絵本の「構成」と「表現手法」について述べてみたい。特に「子ども向けの物語における結末の結び方」と「絵本における空間の表現手法」について、従来あまり論じられていない観点から論じることにする。



Maurice Sendak

図-1

### 結末の結び方—ハッピー・エンディング?

「絵本の構成」として、ここではまず、子ども向けの物語（絵本や幼年童話）の結末について考えてみたい。よく私たちは「ハッピー・エンディング」ということばを使う。その意味は文字通りに訳せば「幸せな結末」であるが、このことばは十分に理解されずに使用されているようである。もちろん、子ども向けの物語は、主人公（や特定の登場者）が幸せになって終わるのが望ましいし、子ども

読者にはふさわしい結末があるはずである。しかし、何でも彼んでも「良かった」というのが、必ずしも良い結末とはいえない。

例えば、英国の絵本作家 Beatrix Potter の絵本 *The Tale of Peter Rabbit* (『ピーターラビットのおはなし』) は名作として知られている。主人公ピーターが、畑で盗み食いをして逃げ帰り、最後に具合が悪くなって終わるのであるが、この終わり方は見事な「ハッピー・エンディング」といえる。ピーターは、母うさぎに、「父さんが捕まって殺されてしまったマグレガーさんの畑には決して行ってはならない」と警告されていたにも関わらず、その言い付けを守らず、すぐにその畑に行った。そして、野菜を食べただけ食べ、マグレガーさんに見つかってしまい、あやうく捕まりそうになり、命からがら逃げ帰る。帰宅後、彼は大食いと逃げ回ったせいで具合が悪くなり、苦い薬を飲まされて寝かされる。表面的には、悪い結果に終わったようであるが、ピーターは命を落とさなかったばかりでなく、多くのことを学ぶことができたのである。そして、この作品を読む子どもたちの心には、ピーターの冒険の楽しさと恐ろしさが、あたかも自分が経験したかのように、心の奥底に確実に残るのである。これは結末の見せ方としては、一種のハッピー・エンディングといえる。

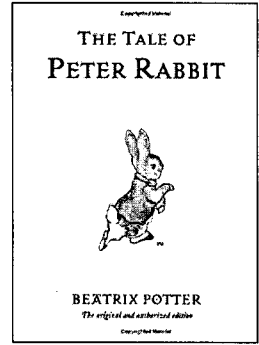


図-2 表紙



Don Freeman



図-3 表紙

一方、アメリカのドン フリーマン<sup>3</sup>の *Dandelion*. (『ダンデライオン』) は、まさにすぐれたハッピー・エンディングを示す例である。この作品は大変おもしろいし、また、考えさせられる作品である。

— ダンデライオン (Dandelion) というライオンが、ある日、友だちのパーティーに招待される。ダンデライオンは大喜びであるが、行くにしても自分の外見が気になって仕方がない。(図4) そこで彼は、そのパーティーにそなえて、美容院に行き、髪の毛を巻いてカットしてもらい、マニキュアもしてもらおう。さらに、新しい服、帽子、ステッキも新調する。

さて、彼がタンポポの花束を贈り物に買って、友だちの家に行って来てドアをノックすると、訪ねた先の友だちの家では、玄関先に、いつもとは違う伊達男(図5) がいて、その姿は流行に合った格好をした、おめかし屋に見える。そこで、友だちは彼が誰なのか認識できない。そうして、ダンデライオンは友だちの家に入ることを許してもらえなかった。



図 - 4

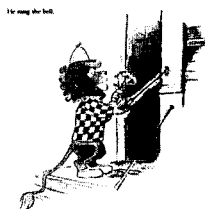


図 - 5



図 - 6

ダンデライオンは、わけがわからず、友達の家の前で行ったり来たりする。すると突然、一陣の風が吹いて来て、帽子を飛ばされてしまう。それから激しい雨が降り始め、ステッキも落としてしまう。さらに、彼の巻いた髪は雨に濡れて解けてしまい、上着はずぶ濡れになってしまう。まもなく雨はやみ、また日が照ってくる。彼の服は乾くが、外見は元のふつうの自分の姿に戻ってしまう。

そこで、ダンデライオンがもう一度、呼び鈴を鳴らす(図6)と、今度は友だちに自分が誰であるかわかってもらえ、家に入れてもらい、パーティーで歓待される。みんなは彼を見て喜んでくれ、ダンデライオンは自分が何であるかを自覚し、二度と、粋なめかし屋にはならないと決心する — という物語である。

この物語は、人は外見ではなく、ありのままの姿で生きることが大切であることを、幼い子どもにもわかりやすく、ユーモアたっぷりに教えてくれる。ダンデ

ライオンは、自身がおしゃれすることによって、まわりに良く受け入れられると思っていた。しかし、実際には友人たちの間で部外者扱いされてしまう。結果的に、彼は好感を与えようと外見を着飾っても、相手にされないことを知り、なによりも、自分自身であることが他者に受け入れてもらえる、ということ学んだのである。

この物語の主人公は、こうしてつらい思いをすることで、自分の生き方に影響を与えるような何かを学んでいる。また彼は経験して変化することによって重要なこと（一つの教訓）を学んだだけでなく、自分自身の愚かさを客観的に笑い飛ばすことができたともいえる。

さて、『ダンデライオン』は滑稽な絵本であるが、幼い読者向けの作品として見れば、主人公ダンデライオンが自分はいかにあるべきか、に気がついたという点が重要なポイントである。人は外見ではなく、ありのままの自分の良さに気づいたということは、とても印象的な終わり方であり、そして、子ども向けの作品としては見事なハッピー・エンディングであるといえよう。

なお、主人公の名前であるダンデライオン(Dandelion)は、もちろんdandy lion(ダンディなライオン)にかけてある。また主人公が購入したタンポポのふわっとした花の開き具合と、ダンデライオンのたてがみは相似形で、象徴的な意味合いがあると思われる。

両作品を読んでいると、読者は初めから終わりまで主人公たちに惹きつけられてしまう。というのも、彼らは慎みなく、自己中心でありながら、それでも一生懸命健気に生きているからである（子どもそのもの）。読者は、このような主人公に惹かれ、同情する。ただ、その一生懸命さが独りよがりで、本当の自分というものを大切にしていない、ということを示すのが、これらの作品のねらいであろう。

『ピーターラビットのおはなし』と『ダンデライオン』は、同様にハッピー・エンディングで終わる物語であるが、両者は物語の始まり方が異なる。前者は親の言い付けに背いて家を出る。すなわち、内的な要因で出発をする。一方、後者は招待状という呼びかけ（外的な要因）に応じて出発をする。その違いが、終わり方にも影響しているといえよう。すなわち、ピーターは言い付けに背いたのだから、最後に罰されたといえるし、ダンデライオンは個人の奢りから失敗したと

いえる。しかし後者は、最後に友人に認めてもらっている。このように、始まりの違いが結び方に影響しているといえよう。

## 絵本における空間の表現手法

続いて、絵本の絵の表現法について、述べていくことにする。

通常、画家は遠近法を用いて空間（距離感など）を表現する。遠近法とは、絵を、見る場所や角度に関連させて描く手法をいう。すなわち、画家はある視点から事物を描くことによって、二次元の紙面に錯覚や深さを出すのである。大まかにいうと、絵本でよく用いられる遠近法には三種類ある。大気遠近法（ATMOSPHERIC）、線遠近法（LINEAR）、そして空気遠近法（AERIAL）である。

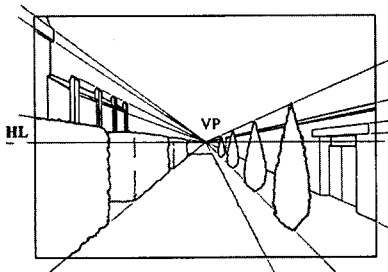


図7 一点透視法による遠近法

各手法を簡潔に言えば「線遠近法」（図7）は、対象物が距離が離れるごとに消失点に収斂するように、平行線を徐々に狭めて、消失点で結合させる手法である。このように描けば、収斂された先の事物が遠くにあるように見える。「大気遠近法」は、遠くにある事物の色をうすく、暗く、ぼんやりさせて、遠い間隔を与える手法である。「空気遠近法」は、事物が遠方にある感じを出すために、遠方の事物の形体を表わす線をぼんやり不鮮明にし、大きさを減じ、そして遠方の事物の細部を詳細に描かない手法である。

次の図8～11は、絵本で「遠近法」を巧く用いた例である。



図 8



図 9



図 10



図 11

図8と9は、Susan Varley の *Badger's Parting Gifts* (『わすれられない おくりもの』)<sup>4</sup> の2場面である。図8は、主人公のアナグマが長いトンネルの向こう(死の世界)に入っていく場面を描いたものである。深いトンネルの先(死の世界)が遠近法を用いて奥深く、効果的に描いてある。図9は、カエルがアナグマとスケートをしていたころを思い出す場面である。遠くにモグラが描いてあり、近景、中景、遠景の遠近の感じがよく出ている。

図10と図11は、Ed Young の *Lon Po Po*<sup>5</sup> の2場面である。これは中国の昔話を絵本にした作品であるが、図10は、三姉妹が狼から逃れて木に登り、地面にいる狼を見降ろす場面、図11は木の上にいる姉妹たちが、狼を<sup>ざる</sup>に乗せて、木

の上に引き上げる場面である。それぞれ、上下の高低の感じが、線遠近法を用いて、効果的に描かれている。

以上、4場面を用いて示したように、1場面（1ページ）ごとの、登場者や背景の距離感は、このような遠近法を用いて描写することが可能である。そして、こうした描写は、絵に奥行きを出し、また各場面は意図した雰囲気を書画的に演出しているといえる。

ところで、絵本は複数枚の二次元の紙面に三次元の空間を演出する以上、通常の遠近法とは異なる、独特の空間表現をする必要がある。なぜなら、絵本はページを一枚一枚、個々に見て理解するものではなく、連続するページをめくって見ることによって、内容（物語や情報）を理解するものであるからである。

それゆえ、絵本の空間は紙面の奥行きに入っていく画法で描くというより、前のページから次のページへと連続して、空間をつないでいく、あるいは場面を変えていく手法を必要とする。そのつなぎや変化を効果的に描くために、絵本は独特の表現手法を用いて空間を演出する。以上のことを説明するために、まずは、絵本の最も基本的な手法について述べていく。

## 枠（舞台）と役者

手はじめに、絵本『よあけ』<sup>6</sup>で有名な絵本作家ユリー・シュルヴィッツの『絵本論』<sup>7</sup>を参考に、絵本の絵の表現法を考えてみよう。シュルヴィッツは、絵本は「枠」という舞台で、「役者」である登場者たちが活躍する表現体であると説明している。図12は、彼のいう枠と登場者の考え方を筆者が描いたものである。これが絵本の基本である。この枠（舞台）の中で、役者（登場者）たちが動いて、物語を展開していくのである。

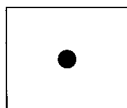


図12 枠（舞台）と役者

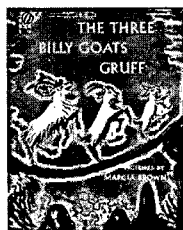


図13 表紙

さて、絵本は文字を横書きで表記することが多いので、読者の目は文字の流れを追って、左から右に動く。当然、絵も同じように左から右に動かす。であるから、例えば、主人公は左から右に向かって動く（進む）というのが自然である。図 14 は、名作『三びきのやぎのがらがらどん』<sup>8</sup>の初めの見開きページであるが、三びきのやぎたちは、左ページの左下隅に位置し、これから右上の山に登ろうとしている。テキストは以下のように語っている。「むかし、三びきの やぎがいました。なまえは、どれもがらがらどん と いました。あるとき、やまのくさばで ふとろうと、やまへ のぼっていきました。」

こうして、三びきは出発するのであるが、進行方向は左から右へ、山に向かって左下から右上に動いて行く。山に上る様子を描くのであるから、こう描くのはきわめて自然な描写法である。ところが、ただ左から右へ、単に左下から右上に動かすだけでは、絵は動かない。絵本作家は、ここで工夫して、登場者を動かしていくのであるが、それは、絵本という表現媒体のページ枠と深い関係がある。

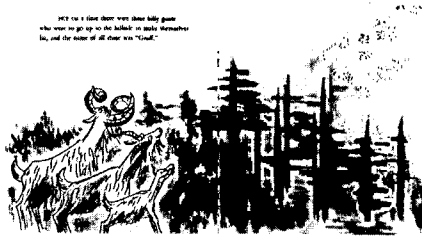


図 14

## 背景の役割

シュルヴィッツは以下のように、図 15 を示して、枠（舞台）と役者の動きを説明している。図①～③では、どれも自動車走っている。左から右に動いていると思って見ていただきたい。①では枠がなく、つまり舞台がないので、車が動いているかどうか、よくわからない。②では、車が動いていると読み取れる。なぜなら、ここには枠（舞台）があるので、枠との関係で車が移動している見えるのである。①と②では、同じ位置に車を描いてあるのに、枠のあるなしによって、このように違って見えるのである。②のように、紙面の中で枠と役者の配置



に変化をつけることで、動きが出せるのである。

③では、枠内に、特定の背景を加えて、連続する絵に場所の感覚を与えている。この連続絵は、車がどこを進んでいるかを、はっきり示しているといえる。また、背景を描き加えることによって、よりおもしろさが出るのである。シュルヴィッツは、このような関係がおもしろさを演出するためには必要で、舞台と役者は、その重要な要素であると述べている。<sup>9</sup>

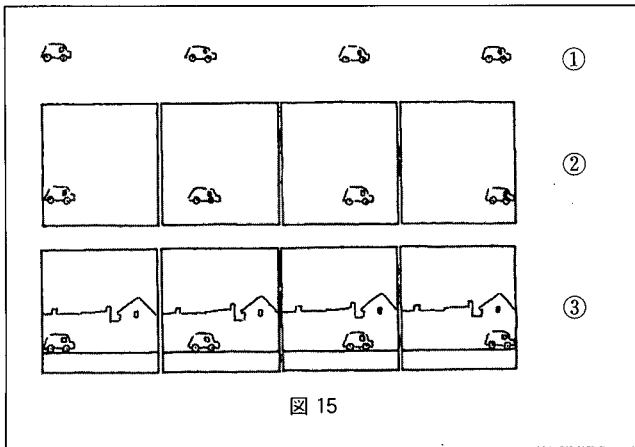


図 15

さて、「枠」とは紙面を囲む線をいうが、絵本では実際に囲む枠が描いてある場合と描いてない場合がある。話を『がらがらどん』にもどすが、この絵本は枠が描いてない例である。このような場合、ページ（四角の紙面）そのものを枠と考える。

図 16 は『がらがらどん』で、二ばんめやぎが、橋を渡りにやってきた場面である。図 17 は、同じく、二ばんめやぎとトロルの掛け合いの場面である。このページのテキストは以下のように語っている。

「だれだ、おれの はしを がたごとさせるのは」と、トロルが  
どなりました。

「ほくは 二ばんめやぎの がらがらどん。やまへ  
ふとりにいくところだ」と、その やぎは いいました。

まえの やぎほど ちいさいこえではありません。

「ようし、きさまを ひとのみにしてやるぞ」と、  
トロールが いました。



図 16



図 17

図 18 は、にばんめやぎが難を逃れて山に逃げ去る場面である。テキストは以下のように語っている。

「おっと たべないでおくれよ。すこし まてば、  
おおきいやぎの がらがらどんが やってくる。  
ほくより ずっと おおきいよ」  
「そうか、そんなら とっとと きえうせろ」と、  
トロールが いました。



図 18

さて、図 16～18 を見比べてわかることは、シュルヴィッツの説明図と同じように、役者である「やぎ」が見開きページの枠の中を確かに動いているということである。また、シュルヴィッツの説明枠の背景と同じように、画家は背景の山やエゾ松の位置、橋の大きさやたわみ具合まで工夫して描き、やぎを確実に動かしている。このような描写で、やぎははっきり先に進んでいるように見えるのである。

さらに、やぎの配置を見ると、図 16 と図 17 では左ページに配置してあるが、図 18 では、右ページに配置してある。登場者を左右のどちらのページに描くかということは、絵本では重要なことなのであるが、画家は的確にやぎを配置して、左から右へと移動させている。図 17 で体重を後脚に乗せたやぎが、図 18 で軽やかに着地し、体重が前脚にかかっている様子がわかる。

### 「間」と配置、そして登場者の向き

絵本の基本的表現手法として、ここで確認しておきたい点は、絵本は「ページをめくって楽しむ表現媒体である」ということである。多くの絵本はページを右から左に一枚ずつめくって楽しむように作られている。この人間的な動作が原始的で、また温かみがあっていいのだが、この時、絵本表現の急所ともいえる大切なことが起こる。それはページをめくる時に、ページとページの間に「間」ができるということである。絵本は「時間の流れで成り立つ芸術」であるが、めくる時に、どうしても無時間の瞬間ができてしまうのである。この「間」を上手に置くことが、絵本を作る人にも読む人にも大切なことである。

『がらがらどん』のおもしろさは、やぎとトロルの掛け合いにある。二ばんめやぎの場面でも、テキストを上手に分けてページ割りしている。すなわち、図 17 と図 18 を見ると、図 17 で、〈「ようし、きさまを ひとのみにしてやるぞ」と、トロルが いいました。〉で文章を切り、ページをめくらせて、〈「おっと たべないでくれよ。すこし まてば、おおきいやぎの がらがらどんが やってくる。ほくより ずっと おおきいよ」〉と答えさせている。この文章の前後に上手にページをめくる「間」を入れているのである。こうして、テキストと絵が響き合うのである。

また、図 17 と図 18 の各絵を見ると、図 17 で左ページにいたやぎは、図 18 では（橋を渡り切り）、右ページに移り、顔の向きが変わっている。すなわち、図 17 では前向きであったが、図 18 では振り向いている。トロルも同様に、図 17 では、右ページにいて、左向きに待ち構えて、今にもやぎを食べようとしているが、図 18 では左ページに移り、やぎをやり過ごし、顔の向きを変えている。すなわち、図 17 では後向きであったが、図 18 では追いかけるような格好でやぎを見送っている。1 ページめくる間に、このような絶妙なページ配置、顔の向き、やぎとトロルの位置の入れ替わりがあり、登場者を動かしている。『がらがらどん』の絵の巧さは、このような描き方にもあるといえよう。

### 絵本における登場人物の動きと方向性・枠と囲い

次に、絵本では、いかに場面展開を効果的に行うかを、1 冊の絵本を用いながら説明する。用いる作品は、英国の絵本作家 Jan Ormerod (ジャン・オムラッド) の作品 *Sunshine* (『陽光』)<sup>10</sup> である。内容は、幼い娘が朝目覚めて、両親を起こし、外出するまでのひとときの様子を描いたもので、絵のみで展開した特異な作品である。

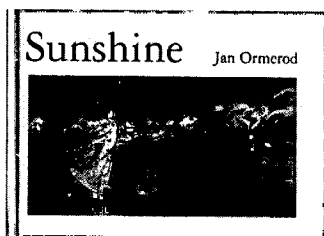


図 19 (表紙)

Sunshine

Jan Ormerod



図 20

ところで、この絵本には文字がない。いわゆる文字なし絵本（絵のみで展開する作品）であるので、特に絵の流れが語りの重要な要素となっている。このようなテキストを視覚言語と呼ぶことがある。

通常、絵本では横文字の流れに沿って人物を左から右へ、また上から下へと動かすのが基本（絵本における登場人物の動きと方向性）であるが、この絵本は、

こうした流れを忠実に描いている。ここでは、数ページを用いて、人物の動かし方と方向性についての空間表現を述べてみたい。

さて、この作品は連続する絵で、以下のように物語を語っている。まず表紙は、朝起きて、まだ眠たい娘が父親のベッドに上っている場面（図 19）を示しているが、幼い娘は後ろ向きに描写され、オレンジ色と黄色系統の暖色系の色合いで着色されている（裏表紙はクリーム色で着色されている）。

前の見返しには、丸枠絵があり、仕事に行く父親と娘が描かれている。後の見返しには、これからお出かけする娘と母親の様子が後ろ姿で描かれている。

扉（タイトル・ページ 図 20）には、人形を持つ娘の姿が、右向きに描かれている。これから、ページをめくる方向（右）に向かって進行することを示している。しかもページの右端に立って、読者がページをめくりたくなるように、配置を工夫してある。

次のページから、物語の中核となる部分が始るが、全体の構成は基本的には見開きページで展開し、向かい合うページに、さまざまな形体、種類の紙面構成をして展開している。

また、各紙面（ページ）は、枠のあるページ、枠のないページ、コマを用いたページなど、ページデザインに工夫がされている。画材には、ペンと筆が用いられ、水彩絵の具にて着色されている。

描写について、ページを追って順に見ていくと、早朝は暗めの黄色、オレンジ色など暖色系統で始め、朝食時は、涼しげな青色系統の色で描き、家を出発する前は、だんだん色を強め、はっきりした色合にしている。目が覚め、家を出るまでの色合いをだんだん強めているのである。

向かい合う見開きページの構成を見ると、枠や囲み線が全て異なるデザインで描かれている。また、ページに濃い色のアクセント色（青、赤）を置いてある場面があり、その箇所読者の視線を集めている。

細かく見ると、枠の有無で、画面に表情を出していることがわかる。枠のある場面は、すなわち枠で囲っているのであるから、制限されている感じが出て、動きがおとなしく静的である（娘が寝ている母親をそっと起こす場面 図 21）。一方、枠のない場面（または、枠の外枠線が消された場合）は、制限がない感じが出て、動きが自由で伸びやかで動的である（慌ただしく外出の準備をする場面



図 21



図 22

図 22)。さらに、枠の形態（大きさ）で、速度に緩急をつけている。すなわち、大きい枠で囲んで描いた場面は、登場者の動きが緩やかに、動きは大まかに進む。例えば、起きて間もない場面が、緩やかな動きで静的に示されている（図 23）。一方、小さい枠（コマ）で囲まれた場面は、動きは小刻みに、こまめに速く進む。例えば、着替えの場面は子どもの着替える様子がてきぱきと、動的に示されている（図 24）。



図 23

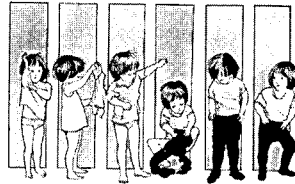


図 24



図 25

さらに、ページから、身体やものがはみ出して描かれる「はみ出し」が有効に用いられている。例えば、図25では、両親が、出かける時間が来ていることを知り、大慌てで外出の支度をする様子を出すために、身体の一部を、各枠からはみ出させている。

以上、英国の文字なし絵本を用いて、絵本の表現手法である、登場者の進行方向、配置、ページ構成、着色の濃淡の具合、視線を集めるアクセント、枠の性質、枠の有無、囲み線（コマ）、はみ出しなどの手法を挙げて簡潔に示した。

## おわりに

この論考では「絵本の構成」と「絵本の表現手法」について論じた。前半は、物語の構成として「子ども向けの物語における結末の結び方」について、後半は、絵本の表現手法として「空間の表現手法」について、説明を試みた。

絵本のテキスト構成も絵画的表現手法も、絵本を楽しみ味わうために創出された、独特の表現方法である。これらの手法にそって、読者は絵本を順次めくって楽しむのである。絵本の読者層は広い。零歳からお年寄りにいたるまで、また男女に関係なく読者が多いことと、その表現内容には関係があると思われる。すなわち、物語絵本の結末の持つ意味の深さが年齢にかかわらず、読者に訴えるのである。また独特の視覚言語が、人の視覚機能を無理なく自然に導いていくことも、絵本の魅力に関係していると思われる。本論では、その一部を紹介し、説明した。

子どもの活字離れが叫ばれるようになって久しいが、今日、子どもたちが本に親しまないだけでなく、ごく幼い時期からゲームや携帯で遊ぶことが不安視されている。幼い時に読書体験をしないまま、成人になることも珍しくない時代である。世にすぐれた絵本がたくさんあるのだから、親も保育士の先生方も、労を惜しまず、良い絵本を探し、選び、できるだけ生の声で絵本を読んで上げて欲しいものである。すぐれた絵本や物語は、子どもの一生を支えるくらい影響力を持っている。そして、なにより楽しい時間を大人と子どもで共有して欲しい。すぐれた「ハッピー・エンディング」を持つ作品は、子どもの心に入り、その子の人生の指針とさえなるのであるから。

## 資料

### I. 作品

- [1] Brown, Marcia. *The Three Billy Goats Gruff*. New York: Scholastic, 1957.  
(邦訳) マーシャ・ブラウン作・絵、瀬田貞二訳、『三びきのやぎのがらがらどん』、福音館書店、1965年
- [2] Freeman, Don. *Dandelion*. New York: Viking Press, 1964.  
(邦訳) 『ダンデライオン』、ドン・フリーマン作、アーサー・ビナード訳、福音館書店、2005年
- [3] Potter, Beatrix. *The Tale of Peter Rabbit*. London: F. Warne, 1987.  
(邦訳) 『ピーターラビットのおはなし』、ビアトリクス・ポター作、石井桃子訳、福音館書店新装版、2002年
- [4] Ormerod, Jan. *Sunshine*. London: Frances Lincoln, 2004.
- [5] Varley, Susan. *Badger's Parting Gifts*. New York: Lothrop, Lee & Shepard Books, 1984.  
(邦訳) スーザン・バーレイ作・絵、小川仁央訳、『わすれられないおくりもの』、評論社、1986年
- [6] Young, Ed. *Lon Po Po*. New York: Philomel Books, 1989.  
(邦訳) エド・ヤング再話・絵、藤本朝巳訳、『ロンポポ - オオカミと三にんのむすめ』、古今社、1999年

### II. 引用文献

- [1] Biographical Information on Don Freeman, <http://donfreeman.info/biographical-sketches/>
- [2] Shulevitz, Uri. *Writing with Pictures - How to Write and Illustrate Children's Books*, New York: Watson-Guptill Publications, 1985.

### III. 引用図版

- [1] Biographical Information on Don Freeman, <http://donfreeman.info/biographical-sketches/>
- [2] Brown, Marcia. *The Three Billy Goats Gruff*. New York: Scholastic, 1957.
- [3] Freeman, Don. *Dandelion*. New York: Viking Press, 1964.
- [4] Ormerod, Jan. *Sunshine*. London: Frances Lincoln, 2004.
- [5] Potter, Beatrix. *The Tale of Peter Rabbit*. London: F. Warne, 1987.
- [6] Sendak, Maurice. *Caldecott and Co.* City: Noonday Pr, 1990. cover.
- [7] Shulevitz, Uri. *Writing with Pictures - How to Write and Illustrate Children's Books*, New York: Watson-Guptill Publications, 1985.
- [8] Smith, Ray. *Introduction to Perspective - Art School*, Dorling Kindersley Publishers Ltd; New edition, 1999. p.20.
- [9] Varley, Susan. *Badger's Parting Gifts*. New York: Lothrop, Lee & Shepard Books, 1984.
- [10] Young, Ed. *Lon Po Po*. New York: Philomel Books, 1989.

### IV. 参考文献

- [1] Lewis, David. *Reading Contemporary Picturebooks*. New York: Routledge/Falmer, 2001.
- [2] Nodelman, Perry and Mavis Reimer. *The Pleasures of Children's Literature*. Boston: Allyn and Bacon, 2003.



- [3] Nodelman, Perry. *Words about Pictures*. Athens: University of Georgia Press, 1988.  
 [4] Schwarcz, Joseph. *Ways of the Illustrator*. Chicago: American Library Association, 1982.

註

- 1 ユリー・シュルヴィッツの『絵本論』、モーリス・センダックの『絵本論』などは、すぐれた絵本論として知られている。  
 Shulevitz, Uri. *Writing with Pictures - How to Write and Illustrate Children's Books*, New York: Watson-Guptill Publications, 1985.  
 Sendak, Maurice. *Caldecott and Co*. City: Noonday Pr, 1990.
- 2 Nikolajeva, Maria and Carole Scott. *How Picturebooks Work*. New York ; London: Garland Publishing, 2001.  
 Pantaleo, Sylvia and Lawrence R. Sipe. *Postmodern Picturebooks*. New York: Routledge, 2008.
- 3 Don Freeman, 1908 年、カリフォルニアのサンディエゴ生まれ。幼い頃から絵や音楽が好きで、セントルイスの高校を卒業後、ニューヨークに移り、ジャズトランペット奏者として生計を立てた。同時期、夜間のアートスクールやサマースクールで絵画を学ぶ。彼は音楽、演劇などに関心を持っていたので、ブロードウェイに通いつめ、俳優や裏方などのスケッチをしているうちに、ヘラルドトリビューンやニューヨーク・タイムズ誌の演劇欄の挿絵を描くようになった。さらに、演劇関係のイラスト、アートポスターなどの仕事を手がけるようになり、7年以上に渡って、William Saroyan や Brooks Atkinson の作品に挿し絵をつけたりした。1950 年代の中ごろから、子どもの本の作家となった。1979 年に 70 歳で他界。代表作は *Corduroy*, New York: Puffin Books, 1976.  
 Biographical Information on Don Freeman, <http://donfreeman.info/biographical-sketches/>
- 4 Varley, Susan. *Badger's Parting Gifts*. New York: Lothrop, Lee & Shepard Books, 1984.
- 5 Young, Ed. *Lon Po Po*. New York: Philomel Books, 1989.
- 6 ユリー・シュルヴィッツ作・絵、瀬田貞二訳、『よあけ』、福音館書店、1977 年
- 7 Shulevitz, Uri. *Writing with Pictures - How to Write and Illustrate Children's Books*, New York: Watson-Guptill Publications, 1985.
- 8 マーシャ・ブラウン作・絵、瀬田貞二訳、『三びきのやぎのがらがらどん』、福音館書店、1965 年
- 9 Readability (可読性 面白く読めること) 読者が、一つの枠から次の枠へ、たやすくたどっていくことができ、それらの枠で、何が起きているかを理解できることを意味する。連続する絵を読み取れるかどうかは、舞台と役者の明確な関係にかかっている。こうした舞台と役者の関係は、変化するかもしれないが、常に明確でなければならない。  
 注 7 掲載書 22 ページ
- 10 Ormerod, Jan. *Sunshine*. London: Frances Lincoln, 2004.  
 Jan Ormerod, 1946 - オーストラリアの小さな町に生まれ、三人の姉と共に育った。子どもの時は、いつも絵を描いて過ごし、美術校に進学。絵画と彫刻を学んだ。The Western Australian Institute of Technology and Design in Education の助手となり、中高で教える。その後、美術学校などで教鞭を執る。1982 年、最初の作品 *Sunshine* で、マザーグース賞を受賞。現在は英国のケンブリッジに、二人の娘と住み、ウサギ、二匹の猫、そして、にわとりなど、さまざまなペットを飼って暮らしている。その他、*Lizzie Nonsense* (2004) や *Sky Dancer* (1996) などの作品がある。オームラッドは、子どもの生活を細かにやさしく観察する画家として知られている。彼女は人体を詳細に観察し、日常の姿を美しく描くことのできる作家である。